

第 1 回「福井の教育」向上会議 議事概要

- 1 日 時：平成 26 年 11 月 26 日（水）10：00～12：00
- 2 場 所：福井県庁 7 階 特別会議室
- 3 出席者：下谷座長、石川委員、津田委員、徳本委員、中室委員、永瀬委員、長谷委員、
羽田野委員、松木委員、吉田委員
福井県教育委員会：吉井委員長、西野委員、林教育長

4 結果まとめ

- (1) あいさつ（吉井委員長）
座長選出（福井県立大学学長 下谷委員）
- (2) 「福井の教育」向上会議の設置について（教育振興課長）
- (3) 協 議
 - ① 福井県教育振興計画の進捗状況について
 - ② 「福井の教育」の現状と今後の課題について

◆ 意見交換

<秋田委員>（ビデオメッセージ）

- ・結果として福井の学力・体力が高いのは家庭と学校が幼児期からつながって誠実な取り組みを続けているためである。
- ・乳幼児期のつながりは一生のコミュニティであり、それを活かしていくとともに、高校や大学で外に出た人がどのように福井に還元するかという職業と学校教育のつながりも考えていくことが必要である。
- ・地域のつながりは、弱くなりつつあるし、人がつながって支え合う環境をどのように残していくか。非認知能力、協働する力を伸ばすことが重要である。

<禿委員>（代読）

- ・つながることは、自分が生かされているということに気づいてはじめて可能となる。
- ・幼児教育の段階から大学に至るまで、「自分が生かされているということ」に気付くための教育をどのように実践していけるかが重要である。

<石川委員>

- ・保護者の立場で見ても、学校の教員は頑張っている。熱心な指導もしてくれるし、地域とも積極的に関わり、特産である越前和紙の事業者と教員・子どもと一緒に学ぶ紙すきウィークなども行っている。
- ・今後も PTA、教員と子どもがスクラムを組んで対応することが大事である。

<津田委員>

- ・5歳児までにどんな力を身に付けるかが先に響いていく。保育所・幼稚園の段階でコミュニケーション能力は培われるし、いじめなども早い段階で始まる。
- ・5歳までの子育てで生きていくための知恵を付けることが重要である。何が変わるかという具体的な数字は難しいが、子どもが自信や発見を経験することが必要である。
- ・5歳児ができないことは大学生になってもできない。幼児教育では長く接する保育士の力が重要である。
- ・教員OBや保育士OBを活用して、経験を若手教員や保育士に伝えることも大事である。担任を支えるような形でもいい。

<徳本委員>

- ・数字だけを前面に出して教育を議論することには危惧がある。何かをしたから数字で何かが変わる、というだけでは表せないことがある。
- ・へこたれない根性や柔軟性、創造性など、数字には示すことができなくても大事なことはある。
- ・地域での体験によりコーディネート力を身に付けることが個人の可能性を広げるし、見えないところを大切にしたい教育を期待したい。

<中室委員>

- ・5歳までの教育が重要であるということは100%正しい。経済学的な収益率は、高校や大学に比べると幼児教育の方が圧倒的に高い。機会費用の閾値は小学校低学年にある。
- ・IQなど数値化できる認知能力は遺伝もあるし、10歳までで伸びなくなる。一方で、自制心などの非認知能力は20代前半まで伸びる。教育で伸ばすならこの部分である。
- ・小中学校でも、補習や習熟度別授業に比べると少人数教育の費用対効果は悪い。これ以上の少人数教育は慎重に考えたほうがいい。費用対効果が高いのは放課後学習である。
- ・幼児教育も家庭訪問を増やすなど家庭を巻き込むことが重要である。スマホやゲームを禁止しても勉強時間が増えるわけではない。自分で机に向かわせることが必要である。
- ・限られた教育予算の中で、選択と集中を考える必要がある。

<永瀬委員>

- ・教育では多様性・外の世界との交流が大事である。
- ・手取り足取り教える教育では、平均点は上がっても、自立して頑張る能力が低くなることもあり、居心地のいい世界だけには成長が止まる。
- ・思い切って手取り足取り教える教育をやめることでかえって自主性を育てることもある

のではないか。

<長谷委員>

- ・学力・体力は高くても、福井の子どもが文化の担い手になりうるか気がかり。子どもの文化は子どもが自ら生み出ることが大事。創り出す力を育てるためにも自然体験や生活の中での実体験を増やすこと。
- ・幼児教育についても、小学校につなぐだけでなく、遊ぶ体験を積むことを考えたい。
- ・美術教員も非常勤が増えており、部活動の指導ができない。OBの活用は重要である。
- ・文化財も保存するだけでなく、活用することが重要。地域の伝統芸能などに保護者も巻き込んで参加させることで家庭教育にもつながる。
- ・少子化は進むし、高校再編もどう進めていくか。多様性、特色ある高校をどのようにつくるかが課題である。
- ・中高連携についても、より効果的に一貫性を高めること、教科主任を中心に専門性を高めてほしい。

<羽田野委員>

- ・形には見えにくいですが、社会教育と地域の力が高い学力・体力を支えている。
- ・公民館などでも地域の学習機会をつくっているし、地域のつながりを残していく仕組みを考えてはどうか。
- ・変化を嫌う、自分で行動しない姿勢を変えていく希望学の観点と、決して福井の女性の社会参加が進んでいるとは言えないので、女性の力を活かすことについても検討が必要である。また、県外者・外国人などよそ者の立場を考えることも大事である。

<松木委員>

- ・福井の教員コミュニティの学び合う仕組みは充実している。システムを維持するとともに、早い時期から将来の管理職養成の意識が必要である。
- ・福井の教育・授業研究を世界に発信するとともに、海外からの研修の受け入れなど、福井の学校自体のグローバル化を考えてはどうか。
- ・発達障害への対応などは費用対効果だけでは議論できない。福井の特別支援教育センターなどは10数名の教員がしっかりしたリストを作り対応を授業に反映させている。
- ・学校・学級の規模が小さくなると、小中学校では9年間固定的な関係が続くことになる。その中では異なる年齢層での共同学習などで多様性を担保してはどうか。
- ・学力調査の結果にとらわれる必要はない。協働など実践へのつくり出す力を学ぶことが大事である。

<吉田委員>

- ・幼稚園で英語を勉強していても小学校低学年で途切れてしまう。小学校低学年から継続した英語教育を考えてほしい。英語で算数を教える塾もあると聞いており、小さいうちから教科分けをするのではなく、教科の柔軟性を持たせてはどうか。
- ・文化体験でも教員の事前の教え方によって児童の反応にばらつきがある。せっかくの機会であるし、芸術教育の意義をしっかりと伝えないと効果が出ない。
- ・高校生のインターンでは優秀な高校ほど生徒の意識が低いという話を聞く。
- ・3世代同居が福井のつながりを生む特長なら、3世代同居を支援するなど、社会のつながりを残す施策を具体的に考えてはどうか。

<下谷座長>

- ・子どもの数が減る中では、教育でも政策的に仕掛けていくことが必要である。費用対効果で測ることもあり得るし、費用対効果による判断がなじまない部分もある。3世代同居が例として挙げたが、人為的な仕掛けで多様性を担保してはどうか。

以 上